

完全無欠の悪女です

悪役らしくわがまま人生謳歌します

# 登場人物紹介

カサドール

デステージョの兄。

フィロメラ

コラル侯爵家の令嬢。

イービス

マニャーナ公爵の令息。  
原作のヒーロー。

シエロ

メディオディア公爵家の令嬢。  
原作のヒロインで、  
聖女の力を持つ。

テレノ

デステージョの従者。  
異常な腕力、粗暴な振る舞いで  
親から捨てられた過去を持つ。  
単純で直情的な性格で、  
身体能力が非常に高い。

セリオン

デステージョの従者。  
新しい魔法陣を作り出す  
抜きん出た才能がある。  
原作では最強の魔導師として  
デステージョを追い詰める。

デステージョ

ノクトゥルノ公爵家の令嬢。  
目を覚ますと、  
自分がWEB漫画  
「聖女シエロ」に登場する  
悪女に転生していることを知る。  
断罪を回避し、第二の人生を  
謳歌するために  
「完全無欠の悪女」に  
なろうと奮闘中。

## 第一章 大胆不敵の悪女様

「あら？ まだ死んでないの？」

ため息交じりのつぶやきは、久々に聞く母の声だった。

もう目は開かない。呼吸も苦しい。音も遠くなっていく。

（耳だけは最期まで聞こえるって本当だったんだ）

無情な親の言葉にそんな感慨しかわかなかった。

調理師としてメニュー開発をしつつ、家への仕送りのためバイトもこなし、過労死寸前で倒れた私。今際の際になって現れた母のセリフがこれである。

私の家は貧乏で、両親は不仲だった。父親はめったに家に戻らず、たまに帰ってきたと思ったら、離婚をするよう迫り、抵抗する母から金を奪ってどこかへ行く。

父が去ったあとの我が家の空気は最悪で、母はすべての責任を「可愛げのないお前のせいだ」と私になすりつけた。反対に、父似の弟に対しては、父に拒絶された反動からか愛を押しつけ鼻屑する。苦しい生活の中で、我慢を強いられるのは私だけだった。弟は新品の服を着ていて、私は誰かのお下がりばかり。ろくに食事にありつけず、痩せこけたみすぼらしい私に世間の目は冷たかった。

そうになると、当然弟は姉を見くだし、姉弟の仲も悪くなる。気がつけば、私は母と弟の奴隷のような存在になっていた。

「姉貴が死んだら、俺の学費はどうなるんだよ。俺、国立大学なんて無理だぞ」  
弟の声が聞こえる。

「ちゃんと保険をかけてあるから大丈夫よ」

母は笑った。

（私は高校進学でさえ渋られたのに……。弟は私立大学を目指せるの？）

私は自分と弟の差に胸がえぐられた。

母は私に、『女が勉強するのは無駄だ、高校へ行かずに働いて家へ金を入れろ』と言ったのだ。

私は自分で学費を払うことを条件に高校進学を許してもらい、バイトをしながらなんとか卒業した。そのせいで青春らしい学生生活を楽しめなかった。誘われても一緒に遊びに行けない惨めな私は、自ら友達と一線を引くようになったのだ。

飲食店でのバイト経験をもとに高校在学中に調理師免許を取り、食品会社に就職を決めると、母は『どうせ食い物の仕事をするなら、若いうちは夜働け！ もっと効率的に稼げるだろう！ 昼に働こうだなんて怠け者めー!!』と罵った。

（家に仕送りする金額を増やすことで、ひとり暮らしと食品会社への就職にやっと納得してくれたけど……。限界だったのね……）

動かなくなってしまった体の中で私は切なくなった。

私は母に少しでも愛されたくて、自分のしたいことや欲しいものも諦めて、家に仕送りを続けてきた。恋愛などしている余裕もなく、誰にも弱みを見せられずに肩肘張って生きてきた。

でも本当は友達と一緒に遊びたかった。恋だっけしてみたかった。将来は自分でカフェを経営したかった。

いつか夢を叶えたい、その一心で努力を続け、我慢し、尽くした結果がこれだ。結局ただの金ツルだった。

（もう、他人の顔色を窺って、搾取される人生なんてまっぴらごめん。もし生まれ変わりが本当にあるのなら、今度は好きなことをして自由に生きたい——!!）

私はそう思い、意識を手放した。

次に気がついたとき、目に入ってきたのは見慣れない天井だった。深紅の布に金色の刺繍が施された重厚な天蓋は、一目で贅を尽くしたものだと思われる。驚いて上体を起こし、周囲を見回す。四隅には彫刻の施された柱が立っている。磨かれた黒い柱は歴史を感じさせた。

（まるでお姫様のベッドみたい）

映画でしか見たことのない天蓋付きのベッドだった。掛けられていたのは軽い羽布団。それを押しつけ、慌てて自分の姿をたしかめる。

小さい手は健康的で、白魚のように美しい。モチモチとした手触りで温かく血色もよい。傷や火傷はおろか、シミひとつない肌。

身を包む寝間着は上質なシルクでスベスベしている。寝るときしか着ないのに丁寧にあつらえられていた。

天蓋の布を分け、ベッドから飛び降りる。赤を基調とした壁に、金色の飾りが暗がりでも光っている。なぜか、部屋の造りはわかっていった。

しかし、装飾華美な内装は自分好みではなく、居心地が悪い。

ベッドサイドには大輪のバラが生けられていて、濃厚な花の香りが漂ってくる。

フワフワとした毛足の長い赤色の絨毯の上を歩き、姿見の前に立つ。壁にはめ込まれた大きな鏡は、金色の豪華なフチで囲まれていた。

そのなかに可憐な少女が映っている。豊かな金髪は腰まで届き、緩やかなウェーブを描いていた。海のように青い瞳は、大きくつり上がり、気高く上品で、白い寝間着姿で金の額縁の中に収まる姿は、まるで悪戯な天使のようである。

「この姿は『聖女シエロ』に登場していた……!」

そう、私は生前に読んでいたWEB漫画の登場人物に転生していた。無料で読めるWEB漫画は、貧しい私よりどころだったのだ。

しかし、ヒロインに転生したのではなく――

「完全無欠の悪女デステージョ・デ・ノクトウルノ!!」

なぜか頭に包帯を巻いているうえ、幼女の姿である。

(あら、小さなデステージョはこんなに愛らしかったのね)



実物を見ることができたうれしさに、鏡の前でクルリとターンした。姿を見てお嬢様気分になる。デステージョの体に精神がつけられるのか、言葉遣いまで自然と前世より丁寧になる。

『聖女シエロ』は、公爵令嬢シエロの波瀾万丈の人生を描いた物語だ。数々の苦難を乗り越え、公爵子息と結婚して幸せになる、剣と魔法の異世界ラブファンタジーである。

過酷な環境に置かれたシエロが、それでも前向きに生きていく様子に、自分の苦しい生活を投影し、共感していた私。シエロが幸せになるよう応援していた。

その物語の悪女がデステージョである。何人かの悪女が登場する作品なのだが、デステージョはラスボスの存在で『完全無欠の悪女』と書かれているのだ。

最終的にヒロインの伴侶となる公爵子息はデステージョの婚約者で、彼がシエロに心変わりをしたことをきっかけに、デステージョの悪の心が目覚める。心は悪魔に乗っ取られ、シエロを殺そうとした結果、彼女と元婚約者によって成敗されるのだ。

(どうせ転生するならヒロインに……と思うのかもしれないけれど、私にとってシエロは聖女だもの。私ごときがなつていいはずがない！)

私は『聖女シエロ』の大ファンなため、自分が主人公の中の人になるのはおこがましくて無理である。

(それに、デステージョは悪女とはいえ、成敗されることを除けばシエロに次ぐ最高の設定だもの！)

正直、悪役だろうが、悲惨な前世よりよっぽど恵まれている。

我慢して苦勞して虐げられ、死んだあとまでむしり取られた前世。

だったら、好きに楽しく生きて、殺されたほうがマシである。

(それに私、思ってたのよ。デステージョはチートな設定をなぜか活かしかけてなかつたって。魔力の強さにあぐらをかいていたのか、性格がそうなのか、暴力で問題を解決しようとしすぎ！)

原作設定でチートな能力を持ちつつも、使いこなせず悪女として成敗されたデステージョを思い出し、企む。

(私ならもっと設定を利用して、完璧な悪女になってやるのに)

私はイヒヒヒと笑う。よい人間であろうとして、結局は搾取され続けた前世だった。悪人がさばっていても、神は罰を与えない。そう実感している。

それならば、今度は善人ではなく、悪人として、欲しいものを手に入れるのだ。

『悪女に転生するなんて最悪だ』とほかの人なら思うかもしれないが、私にすれば、これ以上なく最高の転生ガチャを引いたことになる。

なにしろ、デステージョ・デ・ノクトウルノは、ここアマネセル王国にみつつかない公爵家うちのひとつ、ノクトウルノ家の末娘。兄とは不仲だが、両親には溺愛され、『王国一の幸せな娘』と呼ばれている。

(それに、たぐいまれなる美貌と魔力、健康な体と、財力まで持っているのよ。最高じゃない！) 鼻から息をムツフと吐く。

ただし、ノクトウルノ家には黒い噂がつきまといっていた。強大な魔力を代々保有していることが

原因で、禁忌とされる黒魔術を使っているのではないかと疑われているのだ。

黒魔術とは、生き物を生け贄に捧げる古代の魔術だ。特に人間を生け贄にした魔術は効果が絶大で、人さらいが横行し、治安が悪化した。また、失敗すると術者が正気を失ったり死亡したりするリスクもあるため術者にとっても危険だった。

そのため、黒魔術は禁忌の魔術とされ、その方法が記された書物はすべて焚書になったのだ。現在は伝説的な存在となっている。

そんな黒魔術を使っていると噂されるノクトウルノ公爵家は、作中で悪役一家として名をはせていた。

(悪女上等よ！ 人の顔色を窺う必要がないもの。逆に悪女の立場を利用して、第二の人生を謳歌しましょう！ 悪の力で、バッドエンドを全力回避よ！)

ルンロンとした気分で、鏡の前でキメ顔を作ってみる。

幼さの中に色っぽさも兼ね備えており、人類とは思えぬ妖しい美しさを孕んでいた。

(さすが、デステージョ様、お美しい……！)

自分自身ではあるが、惚れ惚れする。

ただ、頭に包帯が巻かれていることが気になった。思わず指で包帯をなぞってみる。

激痛が走り、グルグルと意識が回転する。デステージョの体が覚えていた記憶が、プワリと襲いかかってくる。

私の前世の記憶と、デステージョの今までの人生が混ざり合う。

デステージョの両親の声、屋敷の温度、庭の香り、一気に脳から吹き上がってくる。

デステージョの感情が嵐のように私の心をかき乱した。あるはずのない思い出が、瞼に浮かび、そのときの思いが湧き上がってくる。それなのに、私の前世は上書きされない。

まるで、デステージョの魂と私の魂が融合したかのようだ。

(気持ち悪い……)

私はその場に跪いた。そうして恐怖と怒りとともに、まざまざと思い出す。

この怪我は、ふたつ年上の兄カサドールのせいだということを。

カサドールは、まだ十二歳でありながら、攻撃魔法を巧みに操る。

先日、攻撃魔法の使い方を伝授するといいい、庭に男子の奴隷を放つて、デステージョに攻撃させたのだ。

しかし、その奴隷はただの子どもではなかった。攻撃魔法を防ごうとした瞬間、その奴隷がデステージョに向けて魔力を放った。それはデステージョの力をしのぐもので、彼女は致命的な怪我を負う結果となったのだ。

(カサドールは奴隷の魔力を知っていてけしかけたのかしら？ デステージョのことを殺すつもりだったのかもね)

思わずゾクリとした。カサドールへの恐怖で身震いするのは、デステージョの体だ。しかし、私の心の中では、嫌悪感と怒りが湧き上がってくる。私は感情を抑えつつ、ため息をついた。

(前世では弟に嫌われていたけれど、今世では兄に殺されそうなほど嫌われているとは……。つく

づく兄弟連がないわ)

ただ、なんといっても、デステージョは両親から溺愛されている。その点はラッキーだ。(さて、どうしようかしら？ 原作ではデステージョはカサドルと距離を取っている様子だったけれど……。やり返してやろうかしら？)

私は考える。兄だからといって、自分を殺そうとした相手をただで許してやるほど甘くはない。恐怖で兄の顔色を窺うなんてまっぴらごめんだ。前世のように誰かのいいなりにはもうならない。そのとき部屋のドアがノックされ、メイドのひとりが入ってきた。

鏡の前で跪く私を見て、掃除道具を落とす。

「お嬢様！ 目を覚まされたのですか？」

小さな震え声である。

私がコクリとうなずくと、メイドは一瞬言葉を失い、回れ右してドアを閉めた。

「大変です!! お嬢様が目を覚まされましたー!!」

ドアの向こうから、大きな叫び声が聞こえてくる。

「静かに！ メイドが取り乱すものではありません」

叱責する年かさの女性の声はメイド長だ。

「……！ でも……！ お嬢様が目を覚まされたなら、地下室に」

その言葉を聞き、私はハッとしました。

そして、次の瞬間部屋から駆けだした。寝間着姿のままだが、そんなことにかまってはいられな

い。急がなければ取り返しがつかなくなる。

「お嬢様!? どこへ」

「地下室よ！」

原作のエピソードを思い出したのだ。

「なりません！」

メイド長が呼び止めるが、無視する。

なにしろ緊急事態なのだ。令嬢らしさなどかたぐり捨て、ダンダンと音を立てながら階段を二段飛びで駆け下りていく。

(今、地下室でおこなわれているのは魂召喚の儀式のはず！ 瀕死のデステージョの意識を戻すために、禁忌の黒魔術で魂を呼び戻したと描かれていたわ！ なんとしても止めなくちゃ！)

これが原因で、原作のデステージョは悪女となったのだ。デステージョの魂が消滅しかけており、そこに入り込んだのは『悪魔の欠片』。そのせいで、デステージョはこの儀式のあと性格が歪んでいき、最終的にはシエロを殺害しようとするに至る。

(それに、今は私の魂が入っているんだもの。そこに悪魔の欠片が入ったらどうなるの?)

せっかく手に入れた最高条件の体。デステージョ本人に返すのならいいけれど、悪魔に横取りされるなんてまっぴらごめんだ。

(私の魂はデステージョの体から追い出されて消えるのかしら？ まさか、永遠に魂だけで彷徨うことになったりしたら……)

真つ暗闇をひとりぼっちで漂う姿を想像し、血の気が引いた。

(怖い！ 絶対に嫌!! それなら死んだほうがマシ!!)

地下室の扉が見えた瞬間、私は階段をドンと蹴る。残りの段を全部抜かして飛び下り、扉の前に着地した。

(なんとしても魂召喚の儀式をやめさせないと!!)

私は、地下室の扉を乱暴に押した。

バーンと音を立てて、両開きのドアが開く。

地下室の床には魔法陣が描かれていて、その中央には、デステージヨの魂を召喚するためだからだろう、彼女のドレスを身につけた子どもが椅子にくくりつけられている。なぜか両手に黒い手袋を嵌めていた。

濃紺色の長い前髪のあいだから、瑠璃色の瞳が覗いている。陰気な雰囲気だ。年齢はデステージヨと同じくらいだろうか。

黒いマントを着てフードを被った魔導師たちが数人、魔法陣を囲んでいる。

「やめてー!!」

私は叫びながら魔法陣の中に突入しようとした。しかし、魔法陣に踏み込もうとすると結界が私の侵入を拒む。見えない壁のようなものにぶつかり、バチバチと音を立て、光がはぜる。痺れるような衝撃が体に走った。

そこで、なぜか魔法陣の上に料理レシピのようなものが半透明に表示される。社畜時代によく見

た、幻覚を伴う疲れ目の再発かと思ひ、思わず臉をこすったが消えない。

とある文字がチカチカと瞬いているので凝視すると、一部の綴りが間違っている。

(こんな能力、原作に描かれていたかしら? もしかして私オリジナルの能力?)

驚き疑問に思いつつ、見えたものを、この力を、信じるしかない。

(もしこの力が本当なら、ここが弱点のはず!!)

私は、魔力の使い方がわからないままに間違った文字に手のひらを向けた。

「危ない! デステージヨ! やめろ!」

聞き覚えのある低い声が叫ぶ。

「やめない!!」

私は声をあげ、フンと力を込める。

漫画で見たように、両手のひらから魔力を放出するイメージを再現した。

バリバリと音を立てて結界が裂ける。

私はその隙間から中に入り、縛られている子どもの縄を解いた。そして手を引き、魔法陣の外に出る。

子どもは呆然として私にされるがままだ。

「……我が家の魔導師の結界を破っただ?!」

フードを被った男がそうつぶやくと、駆け寄ってきて私を抱きしめた。

「さすが、俺の妹だ!」

その声からデステージョの兄、カサドール・デ・ノクトウルノだとわかった。

公爵家の嫡男ちやくなんというだけあり、豪華なマントを羽織はねおりっているが、首もとのボタンは外されて、ワイルドな雰囲気かきを醸し出していた。健康的な肉体美を誇っており、年齢よりおとなびて見える。

(本当に禁忌の黒魔術を使ったのね……)

私は驚き呆れる。

「よかった……。目が覚めてよかった……」

カサドールはフードを取り、噛みしめるようにつぶやいた。フードから零れ落ちた金の髪まゆが眩しい。デステージョと同じ金髪碧眼の少年である。

(あれ？ 兄とは不仲だったんじゃないなかったっけ？ 私を殺そうとしていたんじゃないなかったの?)

私は先ほど得た記憶からかけ離れた展開に動揺した。デステージョの体も驚いたのか硬直している。

「……お、お兄様……?」

「フ、フン！ まあ、俺の妹ならこれくらいは当然だがなっ！」

カサドールはそう言いつつ、ギョツと私を抱きしめた。言葉と行動が裏腹だ。しかし、その力強い抱擁ほうようから、すごく心配していたことが伝わってくる。

(……ああ……。あれね、ツンデレキャラだったのね……。それをデステージョは嫌われていると誤解していたと)

デステージョには兄のツンデレが見抜けなかったのだ。私がそう理解すると、デステージョの体

は硬直を解き、緩やかにカサドールを抱き返した。

(本気で不仲な弟を持っていた私からすれば、可愛いものよ)

私は兄のツンを微笑ましく思う。

「私のために禁忌を犯してはいけませんわ。お兄様」

「お、お前のためなんかじゃない。俺の実験だ。お前には関係ない！」

否定する兄だが、私を抱きしめたままである。

(まったく、言動が一致しないわね)

私はカサドールの背中をポンポンと叩いた。

「お兄様は罪をひとりで被るおつもりなのね？ でも、これは私の魂を呼び戻すための儀式でしょう?」

問いかけると、カサドールの体はこわばった。

一方、魔導師たちがザワつく。

「まだ十歳なのに……魔法陣を読み解いたのか？ やはり、ノクトウルノ公爵家の血筋は違う……!」

感心しているところ申し訳ないが、触れた魔法陣の構造がレシピ化されて見えただけだ。間違いには光が瞬く便利機能付きである。

きつとレシピとして見えるのは、前世の仕事がメニュー開発だったからだろう。

しかし、魔法陣に使われた魔法文字は通常使っている文字とは違い、特殊な勉強をした者でなけ

れば読み解けないようだ。

「でも、この魔法陣、間違っているようですわ。これでは、私の魂ではなく別のモノが体に入るところでした……」

入るモノが悪魔の欠片であることは黙っている。悪用されたら面倒だからだ。指摘すると、魔導師たちが魔法陣に群がる。

「そんな……！ 禁術書のとおりにしたはずだが」

「書物が間違っているのか!？」

「あえて、間違ったものを伝えたのかもしれないね」

私が答えると、魔導師たちは膝をつく。

「……そんな、馬鹿な……。我々は踊らされていたというわけか……」

呆然とする魔導師たちが少し気の毒だ。

カサドールはさらに強く私を抱きしめてきた。

「く、苦しいです。お兄様……」

「俺は二度もお前を殺すところだったのか」

苦しそうなつぶやき。もう、ツンする余裕すらないらしい。

そんな様子を見てしまうと、仕返ししたかった気持ちも消えていく。

「俺が、奴隷と手合わせをさせたいせいで、お前の頭は傷を負ってしまった。それから目を覚まさないから、アイツの命でお前を呼び戻そうとしたんだ。それが、お前の魂を消す術とは知らずに」

カサドールは私に顔を埋めたまま、先ほど助け出した子を指さした。デステージョに怪我を負わせた奴隷だということは、男の子なのだろう。

男の子はへたり込んで震えている。

私は大きく息をついた。

「お兄様、離してください」

「怒ってるのか？」

「離してくれなかったら怒ります」

カサドールはバツと両手を離れた。

私は男の子の前で膝をついた。

男の子は体をこわばらせ、うつむく。濃紺色の髪に顔が隠れる。

「ごめんね、変なことに巻きこんでしまって。あなたは悪くないのよ」

「でも、ボクの魔力が暴走しなければ……。お嬢様は怪我をしなかった。殺すつもりなんて……なかった……」

ガタガタと震える男の子に手を伸ばす。

すると魔導師のひとりが声をあげた。

「お嬢様！ おやめください。その者は奴隷落ちです！ 穢れております！ 触れてはなりません！」

その声に、男の子はビクリと体を硬直させて、頭を抱えこんだ。

奴隷落ちとは、重罪を犯した平民が奴隷にされることをいう。

「なにをしたの？」

「親殺しです。魔力の暴走などと言っているが、わざとお嬢様を殺そうとしたに違いない！」

私が男の子を見ると、彼は真つ青になって歯を鳴らしている。

「親を殺したの？」

私が問いかけると、男の子は唇を噛む。

「殺すつもりなんてありませんでした……。父さんが母さんを殺して、次はボクだつて言うから、ただ逃げよう……。…」

そうあえぐように告白した。

私は大きくため息をつく。前世の父を思い出したからだ。

（私の父もクズだったわね。母親を殴って私も殴った。死んでほしい、それが叶わないならいっそ私を殺してと何度願ったか……。）」

だから、この子の気持ちはわかる。

実の親に暴力を振るわれると、まるで存在を否定されているようだと感じていた。産んだあとに殺そうとするくらいなら、初めから産まなければいいとさえ思ってしまった。

「気がついたら、死んでたんです……。お嬢様のときも、わざとじゃなくて……。…」

そう言つて肩を震わせ泣き出す。

「あなたは正当防衛だわ。気にすることないわよ」

私は男の子の頭をヨシヨシと撫でた。

男の子は驚いた様子で顔を上げる。瑠璃色の瞳からポロポロと涙が零れていく。

私はハンカチを出して、その涙を拭<sup>ぬぐ</sup>つてやる。

「……お嬢様……。…」

男の子は感極まったように、顔を赤らめた。そして、ハタと気がついたように顔を背ける。

「いけません。ボクは……。穢<sup>けが</sup>れてる……。…」

「穢<sup>けが</sup>れてなんかないわ。神様があなたの体を使って鉄槌<sup>てつゑ</sup>を食らわせたのよ。いわば天罰ね」

男の子は目を見開いて私を見つめた。

「……天罰……。…」

「そうよ。あなたが気にすることじゃないわ。妻や子どもを殺そうとするなんて、まともじゃないわ。死んでよかったじゃない」

私の言葉に男の子はギョツと目をつぶる。ポロリと涙が絞り出された。

「でも、親殺しは許されない……。…」

「なら、私が許してあげるわ。クズ男を殺してくれてありがとう」

私が微笑みかけると、男の子はポカンとした。

それを見てカサドルが嘔き出す。

「たしかにそれはそうだ。デステージョもたまにはよいことを言う」

「……いや、でも、親殺しは大罪で」

魔導師はなおも食い下がる。

「罪は奴隷落ちで償ったのでしょうか？ だったら、穢れているなどと言われる筋合いはないわ。そもそも、すでに私触ったわ。それで、なに？ 私も穢れたとでも言うの？」

ギロリと睨むと魔導師は黙った。

カサドールも魔導師を睨めつける。

「差し出がましいまねを……申し訳ございません」

魔導師が謝ると、カサドールは満足そうにうなづく。

その様子を見て私は複雑な気分だ。

（私の言うことは聞けなくても、お兄様には謝罪するわけ？ たしかに十歳児のわがままなんてそんなら聞けないでしょうけど……）

考えて閃く。

（だったら、お兄様に仕返ししてスッキリするよりも、仲良くなって利用したほうがよさそうね）カサドールは愛情表現が下手なだけで、デステージョを溺愛しているとわかったからだ。

（お兄様を手のひらで転がしたほうがお得だわ。お兄様も巻きこめば、この子を助けることもできるかも！）

黒魔術の現場にいたのだ。このことを口外されたら、ノクトウルノ公爵家自体に危険が及ぶ。生け贄になる必要がなくなっただとしても、この子は生きて屋敷から出られないかもしれない。

（さすがに私のせいでこの子が殺されるのは気が滅入るもの……。だったら、ノクトウルノ公爵家

に抱きこむのが得策よ）

私は男の子に目を向けた。

「でも、魔力が暴走しちゃうのは困るわね。これから私と一緒に魔法の勉強をしない？」提案すると男の子は驚いたように目を瞬かせた。

「ボクが……勉強……？」

「ええ。だって、この私に一撃を入れられるなんてたいしたものだわ。ちゃんと使えるならとても強くなるはずよ」

「でも、ボクはお嬢様に怪我をさせたくんです。だから」

「うるさいわ。お黙りなさい」

私は男の子の頬をムニッとつまむ。

「悪いと思っているなら言うことをお聞き！」

パシッと言うと、男の子は頬を赤らめて黙った。

私はカサドールを見る。

「いいわよね？ お兄様」

「だが、貴族は貴族と付き合うべきだ」

兄の常識的な発言に私はハンと鼻を鳴らす。

デステージョは完全無欠の悪女なのだ。常識など知ったことではない。

「私、弱い人はずまらないわ。同じ年頃の貴族で、お兄様や私より強い者はいて？」

尋ねると、カサドールはまんざらでもない顔をする。

「たしかに、俺より強いヤツはいないな」

「私が怪我をした原因は、お兄様がその子をけしかけたからでしょ。悪いと思っっているなら、私の言うことを聞いてくれてもいいんじゃない」

圧をかけてニッコリと微笑むと、カサドールは呆れたように肩をすくめた。

「まったくお前はわがままで。そんなお前には貴族より奴隷がお似合いだ！ お前の遊び相手として、ソイツを雇うよう話をつけてやる」

どこまでもツンデレである。面倒ではあるが、持ち上げておくことにする。

「さすがお兄様！ 頼りになるわ！」

私の言葉に、カサドールは満足げに鼻を鳴らした。お手軽すぎるが、とても助かる。

「それで、あなたのお名前は？」

私は男の子に向き直って尋ねる。

「……セリオン……」

ボソリとつぶやかれた名前を聞いて、私は固まった。

「……ん？ もう一度言って？」

「ボクの名前はセリオンです」

今度ははっきりと答えられた。

（聞き間違いじゃなかった——！！ この名前、瞳の色、そして元奴隷、『聖女シエロ』の魔導師

だ——！！）

私は言葉を失う。

聖女シエロを命がけで守る魔導師セリオンは、原作で、片目に眼帯をしている元奴隷の美青年として描かれていた。一時はノクトウルノ家の奴隷として働いていたが、片目を失ったあと捨てられ、孤児院に流れ着くのだ。

（まさか、魂召喚の儀式の犠牲者だったなんて！！ それはデステージョを敵視するわよね……）

その後、セリオンは主人公シエロの盾たてとなり、デステージョを追い詰めていく。

（ここで私がセリオンと知り合えたなら……エンドが変わる!?!）

グルグルと頭の中で計算する。

（よし！ セリオンと仲良くなるう！ なにしろ、セリオンは最強の魔導師になるはずなもの）

フンと鼻息荒く気合いを入れる。

「……お嬢様？」

セリオンがオズオズと私の様子を窺う。

「セリオン、いい名前ね！ 私の名前はデステージョ。これからよろしくね！」

私が手を差し出すと、セリオンは困ったように手を引っ込めた。

「握手、するのよ？」

促すと、セリオンは首を左右に振った。

「ボクなんかの手、汚れてるから……」

「なによ！ 私の命令が聞けないの？」

私はそう言うと、むりやりに手を握る。

セリオンはホツとしたように頬を緩める。

「いいえ。デステージョ様の命令ならば、なんでも従います」

セリオンは奴隸として躡られたのか、私の前で片膝をついて恭しく頭を垂れた。そして繋いだ手に額をつける。

「なんなりとお申し付けを」

そう言って私を見上げた。

瑠璃色に光る瞳が、宇宙から見た地球のようでも神秘的だ。

（つう！ こ、子どもなのになんて色気なの……！）

内心動揺するが、悪女らしく鼻で笑ってみせた。

「そう。せいぜい頑張ることね！」

セリオンの笑顔がパツと輝く。

初めて見る子どもらしい表情に、ズキユンと胸が撃ち抜かれる。

（さすが、サブヒーローのひとり！ 魅力がダダ漏れね……）

私はその眩しさに、思わず眩暈を感じた。

## 第二章 傍若無人の悪女様

私は自室の机の上で、『聖女シエロ』の知識を書き出していた。今後の作戦を練るためである。

WEB漫画『聖女シエロ』のあらすじはこうだ。

体に釣り合わない大きな聖女の力のせいで病弱な公爵令嬢シエロ・デ・メディオディアは、体力がつかまで公爵領の田舎で使用人とともに伸び伸びと過ごしていた。

体力がついたころ、自然豊かで自由だった領地を離れ、王都にやってくることになったのだ。十五歳で魔法学園に入学できるよう、教育を受けるためである。

そのために王都に向かう途中、彼女は山賊に扮したノクトウルノ公爵家の配下に襲われるのだ。

（でも、シエロが可憐すぎて、うちの配下の魔導師が逃がしちゃうのよね。魔法で彼女の髪色を変え、記憶を封じて。まあ、気持ちはわかるわ）

私はウンウンと共感する。WEB漫画で見た幼いシエロは天使のように可愛らしかったのだ。殺せるわけなどない。

その後、シエロは劣悪な孤児院に收容され、そこで生涯の友人、セリオンとテレノに出会う。幼い三人は友情を深めつつ、孤児院の状況を改善していく。

（孤児院で暮らす健気な少女が噂になり、メディオディア公爵家が様子を見にきて運命の再会にな

るのよね！ 魔法が解除され、髪色と記憶が戻るシーンは最高だったわ！

そしてシエロは公女に返り咲く。セリオンとテレノは不遇時代の彼女を守ったとして、一緒に公爵家に召し抱えられた。

それから、学園に通い出したシエロは物語のヒーローであるイービス・デ・マニャーナに会う。ふたりは恋に落ちるが、イービスには親が決めた婚約者がいた。

（そう！ 私、完全無欠の悪女デステージヨ様よ！）

目立つシエロは当て馬的悪女たちにより、学園内でイジメられるのだが、その中心になるのがデステージヨである。

魂に悪魔の欠片が入り込んだデステージヨは悪女となり、イービスとシエロの仲を裂こうと数々の悪事を働く。その過程でシエロは聖女として覚醒する。イービスとシエロは悪魔に支配されたデステージヨを成敗し、幸せに結婚する。

その後、ノクトウルノ公爵家の罪が明らかになり、一家断絶、というのが大まかな内容だ。

（健気に頑張る姿が尊かったのよね。シエロには絶対に幸せになつてほしいのよ！）

そのためには、今後の作戦が必要である。

（そもそも、ノクトウルノ公爵家がシエロを襲わなければいいんだけど……）

ノクトウルノ公爵がシエロの命を狙ったのは単純な理由だった。

現在、アマネセル王国には公爵家がみつつかない。

まず、私の家門、ノクトウルノ公爵家。

それにシエロの家門、メディオディア公爵家。

そして、ヒーローの家門、マニャーナ公爵家である。

うち、シエロとデステージヨが婚姻できる年齢の男子は、物語のヒーローであるマニャーナ公爵家のイービスと、デステージヨの兄カサドルだけだ。

そうなると、イービスがシエロと結ばれた場合、デステージヨは格下か年の離れた相手と結婚するか、他国に嫁ぐかしかなくなる。

娘を溺愛していたノクトウルノ公爵は、なんとしてもイービスと結婚させたかった。地位も申し分なく、年齢も釣り合いがとれ、結婚後も同じ国内で暮らすという条件をクリアするのはイービスしかないからだ。

それでシエロが邪魔となり、殺害を企てたのだ。

（ここで、シエロとお兄様との政略結婚を決めないとところが、我が家らしいところか……。きっと、メディオディア公爵家から干渉されるのを嫌がっているのよね）

私はウーンと考える。

（ということは、私がイービスとの結婚を嫌がれば、シエロを殺害しようとはしないわけよね？）  
私自身は、別に格下に嫁ぐことは厭わない。どのみち、前世よりはマシだろう。一家断絶するくらいなら、他国に嫁いだっていいし、年の離れた相手でもかまわないのだ。そもそも結婚しないという選択肢だってある。

（あつ！ でも、私が原作を改編しようとしたぶん、もとのストーリーに戻そうとする力が働くか

もしれないわ。いわゆる『原作補正』ね。そうなくても、対応できるように、シエロが收容されるはずの孤児院を押さえましょう！)

もし、原作補正が働いた場合、ノクトウルノ公爵家が派遣しなくても、シエロが旅行中に山賊に遭う可能性もあるのだ。

その場合に備えて、少しでも早く彼女を保護できるように準備を整えることにした。

それから一ヶ月後。

私は、スラム近くの孤児院にやってきていた。アマネセル王国の王都クレスタの中で、最も劣悪な環境の孤児院だ。

ここは、『聖女シエロ』でシエロとセリオオンが十一から十三歳まで暮らした場所で、物語の中でシエロがここで発見された際、あまりの不遇な扱いに公爵家が怒り、廃止される。

ちなみに、シエロはまだ孤児院に收容されていない。

セリオオンもノクトウルノ公爵家にいるため、ここに收容されることはないだろう。

私はここを支配することにした。

万が一シエロが孤児院になった場合、いち早く彼女を確保し、生家メディオディア公爵家に恩を売ろうという算段だ。あわよくば、孤児院自体を悪の組織の養成機関にしようともくろんでいる。

(イービスとの婚約話が出る前に、悪女としての悪評を轟かせないとね)

私としては婚約できないように家族を説得するつもりだが、原作補正がかかったら困る。

いくらノクトウルノ公爵家が婚約を推し進めようとしても、マニャーナ公爵家や世間が反対すれば成立しない。そのためには、『アステーションと結婚したらヤバイ』というイメージを確立するのが一番だ。

そんなわけで、「孤児院の子どもを支配する悪女アステーション」になることに決めたのだ。

(それに、悪役といったら三人組だもの。頭脳はセリオオン、お色気担当の私、あとは肉体派をそろえたいところよね)

そうもくろみ、護衛を十人ほど引き連れて、執事とともにやってきた。

建物の周囲は雑草が生い茂り、窓ガラスはひび割れていた。建物の中に入ると、壁紙は破れ、床にはホコリがコロコロと転がっている。荒れ果てた孤児院を見て、執事と護衛は引いている。

しかし、私は驚かない。

(なぜなら、前世で私が住んでいた部屋のほうが酷かったから!!)

掃除もままならないほど働きづめの毎日。転がるペットボトルに、固形栄養食の空き袋。せんべいのように潰れたクッションが布団の代わりになっていた。

思い出しただけでもゾツとする。

私は表情ひとつ変えず、ツカツカと孤児院長室へ向かった。

バーンと扉を開くと、そこにはソファアの上に寝転がり、くつろぐ孤児院長がいた。

年齢は三十代後半くらいだろうか。日に焼けた肌に、無精ヒゲの生えた男である。しわくちゃのシャツがだらしなくズボンからはみ出している。昼間から酒を飲んでいたので、右手にはス

キツトルを持ったいた。

私は執事に向かって、顎をクイと上げてみせる。すると執事は金貨の入った布袋を手渡した。私はそれを手に持つと、ソファーに寝転がっていた孤児院長の顔に落とした。ガシャンと鈍い音がする。

「っ！ なんだ！ てめえ!!」

孤児院長が、ばつと跳ね起きた。睨みつける瞳は三白眼だ。酒臭い息である。そして、護衛に囲まれた美しい少女を見てウツとひるんだ。

「ここにあらせられますのは、ノクトウルノ公爵家のご息女、デステージヨ様にございます」

護衛のひとりが仰々しく答え、私は満足げに腕を組み、ツンと顔を上げた。

孤児院長はそのオーラに押され、思わず「ははー」と床にひれ伏す。

(さすが完全無欠の悪女パワー……。ちよつと怖い……)

思いつつも表情には出さない。

「これから、この孤児院は私が支援するわ。とりあえず、その金貨をやるから、足りない物を整えないさい」

不遜な態度で命じると、孤児院長は慌てた。

なぜなら、この孤児院は闇の組織とつながって、人身売買がおこなわれているのだ。貴族の支援などを受け、その事実が明るみになるのは困るはずだ。

「そんな！ ええつと、そんなわけには、あの、ありがたいお言葉なんです、こんな汚いところ

の孤児にはもつたいないというか、ここは掃きだめで……」

しどろもどろになる院長に、私はヒソと耳打ちする。

「人身売買をしているでしょう？ 知っているわよ」

院長はヒツと息を呑んだ。

「咎めようと思っっているわけではないわ。私に売ってほしいの。今までの商売相手より高く買うわよ。どう？」

私が意味深に伝えると、院長はゾツとする。

「……ど、どういうことですか……？」

「私の手足となつて働く子がほしいの。そんな子を育ててくれたら、さらに高値をつけるわ。教育に必要な経費は私が持つから、どれだけ使ってもいい。できるでしょう？」

提案を聞き、院長はゴクリとつばを飲み込む。

「できないと言ったら……」

「頭をすげ替えれば問題ないわよね？ 散々、いろいろ、してきたようだし？ 明日にでも憲兵に捕まればいいじゃない」

「そんなこと、できるわけ」

「できないと思うならどうぞ？」

院長は顔を上げて私の背後を見る。険悪な顔をして警戒する護衛。余裕な面持ちの執事はなにを考えているか悟らせない。さすがノクトウルノ家に勤めるだけはある。

「ノクトウルノ公爵家の令嬢はまだ十歳だと聞いているが……」

院長はゴクリとつばを飲みこんだ。

「ええ。そのとおりよ」

「信じられない胆力だ」

院長はあえぐようにつぶやく。

「こいつは生まれながらの悪女だ……」

私がチラリと凄みのある流し目を送ると、院長はピツと居住まいを正した。

「いえ、悪い意味で言ったんじゃないやありません。スラムの中で生きてきた俺ですら、これほどの悪女にはお目にかかったことはなく、感心しているんです」

院長は膝を立て、デステージョに頭を下げた。

「おおせのままに。デステージョ様」

「あら、素直なのね。あなた、名を名乗りなさい」

「俺の名はレオです」

「では、最初の依頼よ。レオ。町を巡回し、孤児を見つけたら片っ端から連れてきなさい」

「ああ。ほかの奴らに攫われる前につてことですね？」

私は意味深な顔でうなづく。こうしておけば、シエロの発見も早くなるだろう。

「上玉が欲しいからね。目を光らせておくのよ？」

「わかりました」

「あと、この孤児院の中で、一番手がつけられない乱暴者をひとり引き取るわ」

肉体派の悪役をそろえたかった私は、レオに提案した。

仲間に加えるなら、できれば身寄りがいない者のほうがいい。これから悪女として活躍する予定なのだ。家のしがらみなどで横やりが入るのは避けたかった。

慌てたのは執事である。

「お嬢様！ 突然、なにをおっしゃるのです!？」

「私の遊び相手がほしいのよ。なにをしても大丈夫な子。貴族の子だとそうはいかないでしょ？」

私の言葉に、執事は顔をしかめた。

「お嬢様、なにをなさるおつもりで……」

「うるさいわね」

私は軽くひと睨みして執事を黙らせる。

レオはほくそ笑みながら、院長室から出ていった。

しばらくして連れてきたのはひとりの少年だった。

「こいつがうちで一番力持ちの暴れん坊です」

そうやって紹介されたのは、大型犬のような少年だ。短い煉瓦色の髪は跳ねている。まん丸の瞳は髪と同じく煉瓦色で、ギラギラ光り警戒をあらわにしている。

濡れたシャツのボタンは取れ、裾の足りない破れたズボンを穿いている。濡れた手を拭いたのか、シャツの一部が湿っていた。私より拳ひとつぶん背が大きく、セリオンと比べても厚みのある体つ

きた。

紹介されているあいだも、キョロキョロと落ち着かない。首根っこを捕まえられているのは、どこかへ飛び出していきそうな危なっかしさがあるからだろう。

「お嬢様と同じ十歳くらいです。まあ、正確な年はわかりませんが。名前はテレノといいます」  
私はその名を聞いて思わず瞑目した。

(あー……、『テレノ』といえば、シエロの騎士<sup>ナイト</sup>じゃない……)

セリオンとニコイチでシエロを守るサブヒーローである。作中で三人は孤児院で出会い、絆を深めていくのだ。

テレノは、孤児院の中でも問題児で嫌われ者だった。

そんな彼に平等に接したのがシエロとセリオンである。その恩義を感じたテレノは、シエロが公女となったあとも彼女を慕い続けた。

そして、彼女の盾となり、最終的にシエロを守って命を失うことになる。物語の中のデステーションも散々邪魔されていた。

(物語としてはドラマチックな展開だけど、シエロに出会わなければ、死なずに済んだのにね……)  
私は少し不憫<sup>ふびん</sup>に思う。まだ原作が変えられる段階で出会ってしまった以上、見過ごすことはできない。

(それに、シエロの騎士として優秀だったんだもの。ノクトウルノ公爵家で育てれば、きっと有望な騎士になれるはずよ)

私は期待をかけ、最初の目的、肉体派の仲間候補として、テレノを連れ帰ることにした。

「気に入ったわ。うちに連れて帰って」

私が言うと、テレノは驚いたようにキョロキョロと周囲を見回す。

レオは手もみして喜ぶ。厄介者<sup>やっかいもの</sup>を押しつけられたと思っっているのだろう。

執事は困惑顔だが、反対はしなかった。デステーションのわがままに抵抗しても無駄だと諦めたのだ。

「あと、子どもたちには清潔な衣類を用意しなさい。たっぷりと食事をとらせること。すぐに、建築家を呼ぶから壊れたところを直しなさい。また浴場も作らせるわ。お金はいくらでも出すけれど、横領は許さないわ。会計士を入れるから資料を用意しておきなさい」

「また来るわよ。次に来たときにできていなかったらレオはクビ。私の選定した者を院長に据えるから覚悟なさい」

私は言い捨てると、院長室をあとにした。

意味がわからないテレノは護衛たちに引つ立てられ、ノクトウルノ公爵家へ連れていかれた。

私はテレノを風呂に入れるように使用人に命じた。食事と清潔な衣類を与えてから、セリオンと同じ部屋で暮らすように手配する。

原作中では、セリオンとテレノは同じ孤児院で暮らし、仲がよかったため気が合うと考えたのだ。

しかし、考えが甘かったようだ。  
私はセリオンの部屋の前に来ていた。

扉の向こうからは言い争う声が聞こえる。使用人の使う半地下の部屋は、壁も扉も薄いのだ。  
「お前も買われてきたのか？ 早く一緒に逃げようぜ！」  
テレノの声が響いてくる。

「いかがいたしますか？ お嬢様」

一緒についてきた使用人が私に尋ねる。

「少し、ここで話を聞いてみましょうか」

私は部屋の様子を窺った。

セリオンも、ここで暮らすのが本当は嫌ならば無理強いするつもりはない。ふたりまとめて、遠く離れた孤児院に送り、シエロと出会わないようにすればいい。

「ボクは嫌だよ」

セリオンが静かに答えるのが聞こえる。

「なに馬鹿なこと言ってるんだよ、行くぞ！」

「逃げてどうするの？」

テレノの言葉にセリオンが返す。

「ボクたち子どもが生きていけるの？」

「なんとかして生きていけるさ！ 悪女にいたぶられるよりマシだろ！」

テレノが返す。

「悪女？ 訂正しろ！ デステーション様は女神様だ！ こんなボクに魔力の使い方を教えてください  
さっつているんだぞ！」

荒ぶるセリオンの言葉に、私は赤面してしまう。

ついできた使用人が生暖かい目で私を見る。

「気まずい私は咳払いし、部屋の扉をノックした。

「入るわよ」

そう断ってドアを開ける。

ふたりは私を見て押し黙った。

「なにか足りない物はない？」

私の問いに、テレノが叫びながら飛びかかる。

「オレたちをどうするつもりだー！！」

「あっ！」

セリオンが思わず声をあげ、止めようとする。

私はフンと体幹に力を込めた。すると体が、ふんわりと輝く。

保護魔法を発動させたのだ。保護魔法とは、周囲に魔法の膜を張り、攻撃から身を守る魔法だ。

物理的な攻撃はもちろん、魔法攻撃も防ぐ。

テレノは魔法の膜にぶつかり、バインと跳ね返って吹っ飛ばされる。その勢いのまま壁にぶつか

り、床へ落ちて転がる。

「うわっ!!」

セリオンは呆気にとられ、口をあんどりと開けた。

テレノはなにが起こったのかわからないかのように、キョロキョロとあたりを見回した。

私は腕を組み、彼を見おろす。

(テレノが孤児院で嫌われ者だった原因は、この直情的な行動ね)

設定上は知っていたが、実際に会うとなかなかの問題児だ。

「落ち着いて話を聞きなさい。私はあなたたちに危害を加えるつもりはないわ」

私の言葉は、テレノに響かない。

テレノは再度立ち上がり、立ち向かってくる。

「騙されないぞ!!」

そう叫び、再び襲いかかってきた。そして、同じく保護魔法で跳ねとばされる。

「だから、話を聞きなさいって言っているでしょ」

私は肩をすくめる。

漫画の中では、シエロとセリオン以外にはガルガルと牙を剥いていた。シエロにとっては忠犬だったが、これでは野犬そのものだ。

テレノが懲りずに飛びかかってきて、私はため息をついた。

(うーん……人の話を聞かないで、すぐに暴力へ訴える。これは駄をしないと社会不適合者になっ

ちやうわ)

私は簡単な緊縛魔法を使い、テレノを拘束した。緊縛魔法とは、魔力を縄のように実体化させ、対象物を縛り上げるものである。

「っ!? うわ!! なんだ、これ?」

薄暗いモヤに縛られて、テレノはワタワタと慌てふためく。

「卑怯だぞ! 魔法なんて!!」

わめくテレノに指をさした。その指先を上へ向けると、テレノがふわりと浮き上がる。

「うわあああ! やめろ!! おろせよ!!」

テレノは宙に浮きながら、足をバタバタとした。

私はさらに指を上に向ける。テレノは天井にぶつかるほど浮き上がった。

「っ! ……!! ……!! ……!!」

テレノの顔は青ざめている。

「あまり暴れると、落ちちゃうかもしれないわね。私、魔法苦手だし」

シレッとした顔で言ってみる。

テレノはヒュッと息を呑み、体を硬直させた。

「おい……、なあ……おろ……おろしてください」

静かになったテレノへ冷たい目を向けた。

「話を聞け、と言っているの。おわかり?」

テレノはコクコクとうなずく。

「うん、わかった！ わかったから!!」

私はゆっくりとテレノをおろした。床に足がついたところで、緊縛魔法を解く。

テレノは戦意を喪失したように、その場にヘナヘナと座り込んだ。

「……オレより強い女の子なんて初めて見た……」

意気消沈するテレノとは対照的に、セリオンは目をキラキラとさせて私を見た。

「……さすがデステージョ様。かつこいい……」

その視線が眩しくて、私は思わず顔を逸らす。

「いい？ まずは人の話を聞く、わかった？ そうしないと痛い目に遭うわよ」

そう諭すと、テレノはおとなしくうなずく。

「私は、デステージョ・デ・ノクトウルノ。この国にみつつかない公爵家の娘よ。あなたを孤児院から引き取りました。今日からあなたはこの屋敷で暮らすことになったの。そのセリオと一緒にね。なにか質問はある？」

「なんでオレを引き取ったのさ」

テレノは不信感を隠さず、不貞腐れたように問う。闘争心でギラギラしていた瞳は力を弱め、不安そうに微妙に揺れている。

「テレノが孤児院で一番力が強いからよ」

私が説明すると、テレノは困惑したように眉を蹙めた。

「オレ、一番、力が強い……？ なんでそんなことがお前にわかるんだよ！」

食ってかかる様子から猜疑心が見て取れる。

「ええ、孤児院長がそう推薦したの」

「オレを推薦……？ 嘘だ。みんなオレのこと乱暴だ、怖いって言うてる。オレなんか嫌われてるって知ってる！ 推薦なんかされるわけない！」

「だからなによ？ 私は怖くなんかないし、私のほうがあなたより乱暴よ」

指を一振りしてみせると、テレノはビクリと体を震わす。

「でも、推薦なんて……嘘だ……」

「本当よ。嘘ついてもしかたないじゃない」

私が素っ気なく答えると、テレノは信じられないように確認する。

「本当に？」

私は無言でうなずく。

するとテレノは嘸みしめるようにつぶやいた。

「オレ、推薦された。強いつて……推薦された……！」

そして照れたように顔を赤らめた。

(きつと問題児扱いで、今まで人から推薦されたことなんてなかったのでしょうかね)

私はそんなテレノを微笑ましく思う。

「私は強い仲間がほしいの。だから、あなたを連れてきた。私の仲間にならない？」

私が誘うと、テレノは首をかしげた。

「でも、お嬢様のほうがオレより強い。オレなんか必要？」

自信なさげに曇る瞳は、自分自身を信じられないのかもしれない。複雑な生い立ちと環境が、テレノの自己評価を下げてしまったのだろう。

テレノの問いに私は静かにうなずいた。彼に信じてもらうには、私も本心を話す必要がある。(たしかに、デステージヨは強い。でも――)

「強かったって、ひとりぼっちは淋しいわ」

私の答えに、セリオンとテレノはハッと息を呑む。きっと彼らにも心当たりがあるのだろう。

原作のデステージヨには手下はいても、友人はなく孤独だった。間違いを正してくれる仲間もおらず成敗されたのだ。

誰かに頼っていたら、相談できる相手がいたら、原作の運命だって変わっていたかもしれない。どんなに強くても、間違いを正す人がそばにいてくれなくては、待っているのは破滅だ。

「それにね、大きくなったらきつとあなたたちのほうが強くなる」

私はふたりを見ながら答えた。

「ボクらのほうが強くなるんですか？」

セリオンは小首をかしげた。

「そう信じてる。というか、私より強く賢くなつてちょうだい。必要な物なら全部用意するわ。だから、頼もしい仲間になつてちょうだい」

私の言葉にテレノの瞳が輝きます。

「なにかま？ ……オレが仲間……」

「お願いよ」

私が微笑むと、テレノはコクンとうなずいた。

「……うん、……うん!! やった! 仲間! オレたち仲間!!」

テレノはそう喜んで、私に飛びついてくる。

思わずドシンと尻餅をついた。

(喜んでるのはわかるけど、仲良くない他人に、いきなり、しかも力いっぱい飛びかかるのはよくないわ。この距離感と力加減のなさが周りから嫌われる原因ね)

私はため息をついた。

「デステージヨ様! 大丈夫ですか!? お前、デステージヨ様から離れろ!!」

セリオンがテレノを引っ張る。

しかし、テレノの力には敵わない。

私はテレノのおでこにデコピンをした。普通のものではない。電撃を含んだデコピンだ。ピリッと走る静電気に、テレノは驚いたように瞬きした。そして満面の笑みになる。

「ねえ、今のお嬢様がやったの!？」

テレノは目をキラキラとさせ、懲りもせず両手を広げて、抱きしめようとしてくる。

(ああ、これは早めに躡ないと、テレノも周囲も不幸になるわ……)

私は自分に保護魔法をかける。

テレノが保護魔法の膜に触れた瞬間、ビリリと電流が走った。

テレノは驚き、目を白黒させる。

「お嬢様、すげー!! マジ、すげー!!」

尊敬のまなざしを向けるテレノに、私は頭痛を感じる。

(なんというか……なんだろう、この大型の子犬感……)

テレノの背景に、お留守番中にソファを壊しておきながら、綿まみれで『褒めて?』とねだるシベリアンハスキーの子犬が見えるようだ。

「ステイ!」

思わず指示が零れる。するとテレノはピシッと直立した。私をボスだと認めたのかもしれない。

「いい? テレノ。私たち、まだ友達じゃないわ」

私は冷たい声で論じた。ヒュウと部屋の空気が凍る。

テレノも息を呑んだ。

「信頼関係ができていないのに、勝手に人の体を触ってはダメ」

テレノはシュンとうつぶした。

「オレに触られるのヤだったの?」

イタズラを怒られた子犬のようで心が痛む。

「いきなりだとびつくりするでしょう。まずは仲良くなってから。そうして、相手の許可を取りな

さい」

私が言うと、テレノは真面目な顔をしてうなずいた。

「わかりました。まずは、仲良くなる、仲良くなる……」

テレノはブツブツと反芻はんじゆしていた。

「あと、この屋敷の中なら、自由にいいわ。もちろん庭へ出ても結構よ。門の外に出るのもかまわないけど、外で問題が起きても助けないわ。もし困ったことがあったらメイドに言いなさい」

「はい!! お嬢様!!」

テレノは従順によい返事をした。

茹だるような暑さである。テレノを屋敷に迎え入れ、一ヶ月ほど経った。私はノクトウルノ公爵家の中庭でだらけていた。

「暑すぎてなにも考えられない……」

風通しのよい場所にパラソルを立て、涼みながら勉強を……と思ったのだが無理だ。

別に頼んではいないのだが、テレノが大きな団扇うちわを扇あおいでくれている。力いっぱい扇ぐため、生ぬるい暴風が私の髪をグチャグチャにする。

セリオンは私の隣に座り、魔法陣の勉強をしている。

「テレノ、ページがめくられてしまうからやめてください」

セリオンがテレノを睨む。

テレノはエヘへと笑い、私の真後ろにやってきて私にだけ風が当たるように扇ぎまくっている。

（うん。涼しくないし、髪はグチャグチャ）

でも怒る気力さえ起こらない。

「お嬢様、氷水でございます」

メイドが、氷水をピッチャーに入れて持ってきた。陶器のカップに氷水を注ぐ。コロンと鈍い氷

の音がする。

「こんなに暑い六月は初めてです……。最近、だんだんと夏が暑くなってきた気がします……。」  
メイドがつぶやく。

この世界は日本で描かれた漫画だからか、前世と同じような四季がある。

ただし日本より涼しい設定らしく、夏の暑さを想定していないのか、アマネセル王国は冷房や保冷技術があまり発達していない。氷がないわけではないが、高冷地から切り出して運ぶか、魔導師たちに魔法で作らせるかで、どちらにせよ高級品で少ない量を大切に使う必要がある。真夏は今からだというのに、先を想像するだけで恐ろしい。

この氷水でさえも、ここでは私しか飲めない。暑そうに働く使用人たちが飲んでいるのは冷たい井戸水だ。それも公爵家に勤めているから自由に飲めるが、平民などは常温の飲み物が基本だ。

（常温っていったって、こんなじゃぬるま湯よ……）

氷水を飲みながら私はうんざりしていた。氷が少ないため、冷たい飲み物は発達していないのだ。

（アイスコーヒーが飲みたい!! あわよくばアイスクリームが食べたい!!）

かき氷のような物はあるが、アイスクリームはない。紅茶は普及しているが、コーヒーは『悪魔の飲み物』と呼ばれており、一般には普及せず愛飲家は隠れて飲んでいる。

（コーヒーの輸入はノクトウルノ公爵家の専売特許なのよね。そのせいもあるって、ノクトウルノ公爵家のイメージが悪いのだけれど）

ノクトウルノ公爵家は領地に港を持ち、南の国との交易を一手に引き受けているのだ。珍しいス